

●馬渕昌子 va

馬渕昌子ヴィオラ・リサイタルは、プログラムのすべてにおいて、実に聴きごたえのある演奏内容であった。シューマンの〈おとぎの絵本〉に始まって、ヒンデミットの「ヴィオラ・ソナタ」、西澤健一の〈Into the Dark After a Little While for Viola and Piano〉、シヨスタコーヴィチの「ヴィオラ・ソナタ」までが、小坂圭太のピアノとともに演奏されたが、いかにもヴィオラらしい美しく力みのない音と、きわめて安定度の高いテクニク、そして何よりもいかなるところでも無機的になることがない、暖かみのある音楽性豊かな表情が印象的である。

ヒンデミットやシヨスタコーヴィチのような、かなり晦渋な作品でもこの人が弾くとあまり晦渋には感じられず、表情の豊かさ、多彩さで楽しく聴ける。これは珍しいことと言っておこう。どの曲でも作品への共感度の強さも感じられ、またピアノが単なる伴奏に終わらない主張を持ってヴィオラに対峙してことも好演につながっていた。(2月3日・ザ・エックスホール)